

府中市生涯学習審議会（平成22年度第6回） 会議録

1 日 時 平成22年12月6日（月）午後2時～4時

2 場 所 府中市生涯学習センター 1階会議室

3 出席者（敬称略）

（1）委員13名

加藤 佑子、西勝 義恵、坂本 明美、澤井 幸子、設楽 厚子、芝 喜久子、
白井 紀子、鈴木 映子、寺谷 弘壬、平形 芳郎、比留間 一磨、三宅 昭、
山内 啓司

（2）職員3名

山村生涯学習スポーツ課生涯学習推進担当副主幹、市ノ川企画係長、大木

4 開会

会長よりご挨拶

5 連絡・報告事項

（1）配布資料の確認

（2）報告事項

①東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会について

10月2日（土）武蔵野市

■これからの生涯学習を進めるにあたって、野外活動から入るという形を紹介していた。野外活動というのは、キャンプをやる中で、障害者の方たちを含めた、いわゆるコミュニケーションを学ぶというようなものだった。

■事例発表は調布市の「調布っ子夢会議」、武蔵野市の「むさしのジャンボリー」、小金井市の「青少年のための科学の祭典」についてだった。特に印象に残った「調布っ子夢会議」は、平成12年から開催していて、「中学生一人ひとりが自ら学び考え、学校の枠を超えた中学生同士で意見交換し交流することにより、社会性を育む」ことをテーマにしている。今年は市立・私立の中学校12校から27人の生徒が集まり、「ディベートとは」という講義から始まり、夏休みを中心に事前学習会が行われた。今回のテーマは「日本は小中高の週6日制を導入するべきである。是か非か。」ということについて話し合い、1年に1回中学生が集まり会議を開いている。

②第52回全国社会教育研究大会（福島大会）について

10月28日（木）～30日（土）郡山市内

■全体会の基調講演をされた佐藤安太氏は工学博士で、現在86歳。そして、(株)タ

カラの創業者で“だっこちゃん”“リカちゃん”など作りあげてきた。講演は「未来設計システム思考技術で日本国民・日本国家の輝かしい未来を設計し再生復活をめざす」というものだった。佐藤さんは50年近く社長をやってきて、77歳で引退した。その後、自分が地域でどのようなことに役立つだろうということで、一生懸命自問自答し、その自己実現のために旅などをしたりして、たどり着いたのが、やはりもう一回勉強し直そうということだった。そして、昭和20年に卒業した山形大学大学院に77歳で入られた。83歳で大学院の博士課程を修了し、山形大学法学部の客員教授になった。

佐藤氏は、大学卒業は修了ではなく、その時からが出発と考え、今の若い人たちの何か物事に向かっていく力の薄さに憂いて、若い人たちの役に立ちたいと思い、経営学のための佐藤塾を開いた。(株)タカラ退任の年に設立したNPO法人ライフマネジメントセンターが基となっている。

■第一分科会の「家庭教育支援」について、青森県の五所川原市は人口が6万人くらいのところで、「地域みんなで子どもを育てる地域社会」というテーマだった。NPO法人の子どもネットワーク ステップというところが発表した。親子で遊ぼうという主に乳幼児期の遊びの広場が一つと、体験学習といって父親も参加してもらって、小学生対象の体験学習の場を提供する。学校とは全く違う自己肯定感を養うという目的でやっている。それから子どもまつりといって商店街の協力を得て、子どもの生きがい体験をやって、まさに子ども主役の祭りを催している。ボランティア協議会に所属していて、社会福祉協議会に関わってボランティアの応援がものすごくあるので、ボランティアに参加してくださることによって、少しずつ人が育ち、地域が動き出しているというお話をされた。

もう一つの米子市は人口が15万人くらいのところで、乳幼児期の両親が子育ての知識や技術より心を学ぶことができる講座を実施して、早い段階で人と人との繋がりを見つけて、子育ての悩みや核家族の孤立などを防ぐ試みをしている。タムタム実行委員会というのを設立して、その構成メンバーが元保育課で保育士をやっていた方を中心にして、行政の関係課（子ども未来課、健康対策課）の課長や係長もメンバーに入っていた。生涯学習課が実行委員会の事務局を担当していた。市民と行政がとても連携し合って事業を実施してきている。講座では必要に応じて託児ボランティアによる託児を実施して、子育て中のお母さんたちが安心して講座に出られるように、ボランティアを増やしていったら常時70人くらいの託児ボランティアが登録されている。あとは、講座に出てもらいたいけど出てこないような人には、民生委員を通じて、その家庭を訪問してもらって誘っていた。民生委員など、行政を上手に巻き込んでいって、自分の地域の人たちも全部巻き込んでいって実施して

いる方法が社会教育ならではのやり方なのだと思います。

■第四分科会の「地域の特色や伝統を未来につなぐ社会教育委員のあり方」に出席した。1つめの事例報告は鹿児島県指宿市の社会教育委員だった。地域の見直し、地域の良さを掘り起こす社会教育審議会の活性化はどうあればいいかについて話をされた。指宿市は人口が約4万5千人で、世帯数が約2万戸。諮問された事柄を研究調査して会議に諮らねばということで頑張っている。平成20、21年の諮問が「教育の原点としての家庭教育の充実をどのように図ったらいいか」という問題だった。家庭教育に関するアンケート調査を社会教育委員が自ら行い、実態把握することに役立たせた。やはり社会教育委員が行動するという部分で動いている。

2つめの事例報告のテーマは「自立した地域社会づくりのための社会教育の役割はどうあればよいか」ということだった。その中延町は田園地帯で人口約1万9千人。この町の総合計画は「地域に根ざした住民活動」「地域特有の資源を活かした学習活動」「地域住民のニーズに対応した事業展開」を目指している。それを受けて、その実験取組みとして社会教育研究協議会というものを、社会教育委員の中で立ち上げて、「いきいきフォーラム」というものを企画し、そして地域住民に地域討論の場を提供している。それをするためには、企画・運営を社会教育委員が受け持って、自治会に協力をもらって行った。2つの事例報告から、行動する社会教育委員というものの姿を見せていただいた。

③第41回関東甲信越静社会教育研究大会（東京大会）について

11月26日（金）、27日（土）セッション杉並他

■今回のテーマは「地域教育をリードする社会教育活動の活性化を目指して」で、地域教育というキーワードについて全大会の話の中で繋がっていたのだと思う。記念講演は、「NPOピアサポートネットしぶや」というところで、活躍されている相川さんという理事長をされている方で、「地域主導の子どもの居場所づくりから若者支援へ」というテーマで、なぜ子どもの居場所づくりを始めたかということ、学校教育が変化に対応しきれずに、不登校やいじめ問題などを山積していく状況の中で、子どもの居場所を確保してやるということが大事だということだった。相川さんは中学校の校長先生を退職されて、このボランティアの世界に入られ、渋谷に「ファイン」という居場所を2001年に立ち上げて、「しぶやファインケアサポート委員会」というのを2003年に発展させた形でやっていて、現在は若者を支援する「NPOピアサポートネットしぶや」を2009年からずっと進めている。

若者に中学校を通した支援をすることによって、子どもたち自身の力がついてくるという言い方をしていたが、居場所づくりを核とした訪問型ピアサポート活動と

というのが行われている。その中でサポートされる側の子どもが、サポーター側になるということが大きな力になると実感されていた。初め自分が家庭訪問などサポートされて支えてもらった子どもがだんだん元気になって、今度はその子が別の子のところに今度はサポーターとして参加するような形で、NPOのメンバーの人と子ども達と一緒にこの居場所づくりの活動を進めるということが、非常に地域の活性化の繋がりなどを組み立てていく上で大きな力になっていて、そういう活動が進んでいるという話だった。

非常に元気な形で活動していて、大人だけが世話するというより、当事者の子どもたち、特に中高校生くらいの子どもたちが、いろんな意味で活躍する場が保障されて、もちろん周りの大人がサポートしている。そういう中で繋いでいく、あるいは町づくり、地域づくりが形になっていくことが、次に繋がるという意味で大事なことなのだと聞いていた。

記念講演の後にパネルディスカッションがあり、「地域教育が切り拓く未来」というテーマで、パネラーは独立行政法人の菊川さん、政策研究大学院大学の永井先生、評論家の久田さん、コーディネーターは宇都宮大学の廣瀬教授の4人で、議論し、それぞれが意見を言った後に、意見交換するような形で話が進んでいった。

現在、社会教育主事が52%減という状態で、公立の青少年施設も30%減になっている。客観的な人的なものは決して良くない。そして増えているのが図書館や博物館の学芸員という報告があった。それから、菊川さんのところで、体験活動に関わるアンケートをやっていて、そのデータを見ると、小さい頃に地域でいろいろな経験をしてきた大人は、今からの人生をいろいろな関わりをもって、意欲的にやりがいを持って頑張っているというのがデータから出てきている。そういう地域の中で育った大人というのが、今70代より高齢の人たちがみんなそういう経験を持っている。50代、60代くらいの人たちが、そういう地域で育てられたという記憶を持っている人たちだった。だからその人たちが今こそ地域でいろいろな活動をするというのが、有力な力になるという言い方をしていた。子どもの頃にそういう豊かな体験を持たせるということが、その地域づくりをするうえで、非常に大事な要素だということが、1万人以上のアンケート調査からわかった。体験活動のいろんな差を埋めていくことの中身が社会教育としてはとても大事だし、そういう意味では地域の行事もきちんとやるということが大事だということ言われていた。

永井先生からは、平成に入ってから教育改革提言ラッシュがあった中で、いじめや不登校などが本当に解決されているのか。現状としては非常に厳しい。中学生から20歳くらいの若者の20%くらいが今宙ぶらりの状態になっているので、子どもたちが地に足をつけて社会に参加しきれていないのではないかという現状の指

摘があった。学校が地域から支援される存在だけでよいのか。学校は自ら働きかけることを通して、新しい地域づくりを推進できないかという提言というか指摘があった。学校支援ということが盛んに言われているが、学校自ら地域に出て行くという働きかけているスタンス、これは実は宮崎県五ヶ瀬町教育委員会や島根県雲南市教育委員会の取り組みや新潟県三条市の学校を開放したコミュニティーシステムという言い方で、いくつか全国の中ではすでにそういうことを受けて、学校が中心になって地域と一緒にやっていくという積極的な活動をしているという紹介があった。

地域がしっかりしているところは学校支援が多様にできると言える。次の日に分科会で杉並第一小学校に行っていたが、あそこは地域の学校という印象で、本当に地域がしっかりしていて学校と地域が支えあって、さまざまな取り組みをしている。コーディネーターの先生が言っていたが、私たちが進めていた生涯学習活動の結果がNHKが報道した無縁社会に繋がっていないか。つまり、社会教育活動でいろいろなことをやって、繋ぐとか出会うとか支えると言っているが、現実に無縁社会という状況が報道として出ていたことがショックだった。私もここで無縁社会の話を知るとは思っていなかったが、そう言われていることと、我々の社会教育の活動というのが、どこかで繋がりがあるといえるのか、そういう認識の仕方も必要といえるのか、そういう中で、自分たちの活動を見直すということを目指されているのかと思った。非常にそういう意味では刺激的で、記念講演でもパネルディスカッションでもいろいろ教えていただいて勉強になった。

■第4分科会は「地域の教育力向上を目指した社会教育施設の役割」というテーマで、ワールドカフェ方式でやったが、これは企画もコーディネートも町田市がやったが素晴らしかった。100人程の参加者が10個のテーブルにそれぞれ座り、20分くらい自己紹介を含めて話し、ホストだけを残して全部を回る。同じところに行ってはいけない。初めて会った方とディスカッションをして移動する。3回同じことを20分ずつして、最後に話し合ったことをメンバーに報告しあうという形で行われた。

内容としては、こういうふうに公民館の役割というが、八王子や町田、府中のような大きな市、日の出町という人口1万6千人という小さい町もあるが、やはり各地域で悩んでいることというのが、どうやったら男性の団塊の世代を巻き込めるのか、どうやったら知識を持っている人たちを取り込んでいけるのかなど、思っていることはほとんど同じだった。話しを聞いているうちに府中は素晴らしいと思った。「学び返し」の話もしたが、これこそ生きてきた伝統を繋げていく、これが本当に生涯学習だし、やっていることは社会教育だと言われた。八王子は2018年に

市政100年を目指して、生涯学習モデル都市にしようとやっている。たまたま出会った生涯学習審議会委員の方は八王子のいちよう塾の講師と多摩市民塾の講師までやっている。それぞれが自分でできることで、社会教育委員としての活動をしているので、もっと行動できる社会教育委員でなければいけないと思った。行政と民間を繋げる立場が社会教育委員ではないか。

場所というが、公民館ではなくても縁側カフェでも寺子屋でもよくて、集まった場所がコミュニケーションの場なので、そこで何でもたたきあって、身近で生きがいのある人生を生きていけるような社会をつくるのも社会教育委員の役目ではないかと感じた。

■第一分科会をやった杉並第一小学校は地域運営学校で、いわゆるコミュニティースクールで学校運営協議会というのがある。理事長が学校を運営していて、校長もメンバーに入っている新しいやり方の運営の中で、学校支援地域本部をいうのを立ち上げて、チーフコーディネーターという方が、授業以外のさまざまな教育外活動を組み立てて、そこに地域の人たちがたくさん入ってきて活動しているという事例だった。吹奏楽部も地元の人が音楽監督をやっていて、チームを組んでいる。小学生だけではなく、中学生、高校生も入っている。50年以上やっていて、非常に立派な演奏だった。

学校支援の部分では朝先生という方からで、1時間目を始める前に朝の自習というのを昔もやったと思うが、その朝自習の10～15分の間に地域の人たちが交代で教室に入って子どもたちの面倒を見ている。プリントなどは先生が用意してくれるが、見守りというかそういう形をずっと続けている。それから杉っこクラブというのが放課後の活動で、私がやっている放課後子ども教室のような取り組みで、日本語検定、漢字検定、けん玉検定などさまざまなことやったり、親子教室といって料理を作ったり、さまざまな活動をしているという話だった。学校の先生も一緒になってその活動の中に入っていくという状況で地域が元気になっていて、非常にしっかりした地域だった。だからこそさまざまな人たちが参加できる。

朝先生は、まだ会社で嘱託のような仕事をしている人だったが、9時から仕事が始まるので、8時～8時15分まで学校にいき、朝、先生をして、8時半ごろに学校を出て会社に行っているという取り組みをしている。その方は去年からやっていて、去年は5年2組、今年は6年2組というふうに担任と一緒に持ち上がっている。2年間やっていると子どもとの人間関係も非常に良くて、いろいろ相談されたり、外で会ったときに挨拶したり、いろいろな形ができると報告していた。この杉並第一小学校は阿佐ヶ谷駅前の学校だが、昔から地域をうまく取り込んで、学校が活性化しているというか、その中で地域の人たちの出番があって、具体的に学び返しを

さまざまな形で子どもたちに行っていると思った。

④東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会について

11月27日（土）セッション杉並

第一ブロックから第五ブロックの研修についての報告と表彰式

表彰（感謝状）芝会長、澤井委員

（表彰状）比留間副会長、野本委員

6 審議事項

（1）前回の議事録の確認について

各委員に校正を依頼した会議録（案）は、一部校正後、市民に公開することが了承された。

（2）最終答申にむけて

比留間副会長より説明。事務局が提言を読み上げ、小委員会委員より説明。

以下のとおり意見交換が行われた。

[意見の趣旨] ■：委員 ➡：事務局

（事務局が読み上げ、小委員会委員が補足説明）

- 「はじめに」の下から3段落目。「これからのことを念頭に置きながら」から始まる次の行の「環境づくりを主要なテーマとしつつ」の「しつつ」は日本語の解釈としては反対の意見が出てくるのかと私はイメージしたが、この下の繋がり部分はもう少し検討したほうが分かりやすいと思う。

それと次の段落の「団塊の世代の地域における活動の機会をいかに設定するか」の「いかに」がこの後にもたくさん出てくる。このへんの表現方法を「いかに」にするか、「どのように」にするか、もう少しわかりやすい表現にしたほうが、受け入れられやすいと思う。

- 文章が長いので、どこかで一つ読点をつけてもいいと思う。

- 「しつつ」と「いかに」が引っかかる。「テーマとしつつ」は「テーマとし」にして、「いかに構築するか」は「どう構築するか」のような程度で修正すればいいと思う。

- （一同了承）

- その段落の3行目「世代にも焦点をあて」で一回切ってもよいか。

- その「団塊の世代にも」の「も」はいらないので、「団塊の世代に焦点をあてる。」でいいのではないか。それが今回の目的のような気もするが、いかがか。
- 団塊の世代だけではないと思う。団塊の世代より上も下もいるので、団塊というのは昭和20年～25年生まれで限られるので、「も」を入れた。
- 「団塊の世代にも」の「も」を無くしてしまうと、この答申全体で団塊世代についてもっと詳しく言及しなければならなくなるので、「も」は必要だと思う。
- それでは「団塊の世代にも焦点をあてる。」で切ってよろしいか。
- どこかで切ったほうが良いと思う。
- 団塊世代の話が出てきたのは、あくまでも生涯学習への関心の喚起と、「学び返し」を推進する環境づくりを主として討議をしてきて、付録的という意味なのか。
- この後に「団塊世代」は提言1の②に入っているので重要だが、それだけではない。ここに入ることで総合性には活きると思うが。
- 中間答申のときに「団塊世代対策を集中的に討議した」とあったので、その気持ちを入れなければいけないと思ったが、それはもう切ってもいいと思う。
- 提言1の②にあるので切ってもいいと思う。
- この段落の2行目「環境づくりを主要なテーマとして討議した。」で切ってしまつて、この後に適当な接続詞をいれて、団塊世代にも焦点をあてたというのをアピールしたらどうか。「生涯学習の実践者」＝「団塊世代」なので、「とりわけ」とか。
- その段落の最後に「特に討議した。」と再度出てくる。
- どこに読点を置くかということですよ。
- 「特に」を前にもってきて、「討議した。」を「話し合った。」にしたらどうか。
- 「特に生涯学習の実践者として」では、いかがか。
- (一同了承)
- まだ「いかに」が4つ続く問題がある。
- 最初のいかにを「どう構築するか」に直す。
- 「団塊世代」も「いかに」も2回出てくるので、「主要なテーマとして討議した。」から削ってはどうか。これは要するに具体的にに向けてなので、「そこから推進計画を具現化し」に続くのではないか。「テーマとして検討」したら、あとは全部その後の提言に入ってくる。本当は全体を代表させようとして、そこにたくさん書いてしまって、そこからだと言葉は違うが、重複するような感じになる。「テーマとして検討した。」でいいと思う。
- 具体的には言わないということですよ。
- まだ「はじめに」ですから。提言の中にも入ってくるので重複している。
- ただ理解しやすくはなっていると思う。

- 全体を代表させようとしすぎたかもしれない。
- この内容が後ろの提言の中にも入ってきていますね。
- 先ほどの「これから」から始まって、「話し合った」まではこれでいいのですよね。その次の文章について重複しているのではないか、ということですよね。文章の中には「学校行事に絡ませて子ども達との接点」というような文言をさっぱり言い表せれば残してもいいと思う。下から2段落目の「いかに設定するか」は前段に「いかに」と出てきているので、無くしても通じると思う。
- 「そこから」は方法論になっているので、詳細がどこかで出ていけばいい。
- ただ、「学校行事に…」も大事だが、「団塊世代」をも含めた参画の可能性も強調してある。
- 「そこから推進計画」の推進計画というのは、この答申を基に誰かが作るのか。
- 文章は活かしていいような気がする。「いかに」を変えるか、カットすればいいと思う。
- 「どうやって」とか「どのように」に変えればいい。
- それぞれを言い換えれば。
- 「そこから推進計画を具現化し」からは、後ろの提言と重複している。なので、そこも切るといえるのはどうか。
- それでは文章を少し直さなければならない。
- 弱くなるか。
- 弱くはないが、3行で「団塊世代」が2回でてくるのもおかしい。
- 「主要なテーマとして検討した」と一つ短い文章にして、そこからというのは、「検討した」段階から推進計画を具現化している。もし切るとしたら、「テーマとして検討した」の後から切れば、「学校行事」、「スポーツ」や「生涯教育」も活かせる。あとは下から2段落目の2行目の「いかに」を「どう」に、3行目「いかに」を「どのように」に変えればいい。
- そのほうが理解しやすい。
- 「団塊の世代」がいきなり出てきて、理解されるか。切った段落には「今後参画する可能性が大いに期待される団塊の世代」と説明があった。
- 「そこから推進計画を具現化し」の後に前段の説明を加えてはどうか。
- 「地域における」を切ってしまっ。
- 下から2段落目「そこから推進計画を具現化し、今後参画する可能性が大いに期待される団塊の世代の活動の機会をいかに設定するか、そして学校行事に絡ませて子ども達との接点を地域の中でどう作り出すか、およびスポーツなどを通じて世代を超えた生涯学習をどのように実践するかなどについても考えた。」でよろしいか。

■ (一同了承)

7 その他

次回開催日程について、以下の日程で開催する事が決定した。

全体会：1月31日(月)午後2時～4時

府中市役所北庁舎3階第5会議室